

日本とマレーシアの互助慣行の比較

—メラカ州の農漁村を中心に—

流通経済大学 恩田守雄

1. 目的

本報告の目的は田植えなどの労力交換のユイ（互酬的行為）、道路補修などの共同作業や共有地（コモンズ）の維持管理のモヤイ（再分配的行為）、冠婚葬祭のテツダイ（支援＜援助＞的行為）という日本の互助慣行(恩田,2006;2019;Onda,2013)について、マレーシアと比較し相違点と類似点を明らかにすることである。

2. 方法

上記の目的を達成するため日本とマレーシアの一般および互助関連の文献を精読し現地調査を行った。2019年8月にマレーシアのムラカ（マラッカ）州の農村漁村で聞き取り（半構造化インタビュー）を実施した。既に韓国（第85回報告）、中国、台湾（第87回報告）を調査し東アジアの互助慣行として発表した（第88回報告）、本報告はフィリピン（第89回報告）、インドネシア（第90回報告）、タイ（第91回報告）という東南アジア研究の延長上にあり、また互助慣行の移出入という点で日本（南洋庁）が統治した南洋群島（第92回報告）の調査とも関連している。なお新型コロナウイルスの感染拡大を受け、2020年3月に東マレーシア（ボルネオ）のサバ、サラワク両州の調査ができなかったため、本発表は半島マレーシアの一部に限定された報告にとどまる。

3. 結果

マレーシアの互助慣行は日本同様近代化の過程で衰退しているが、村落ではまだ伝統的な互助行為によるつながりや絆が見られる。ムラカ州の農村では Tanaman Padi Berkelompok（Tanaman は収穫、Padi は米、Berkelompok は組の意味）という日本のユイ組にあたる6人から7人で稲刈りをする組織があったが、今は機械化や後継者不足からないところが多い。しかしまだ現存する農村もある。漁村では二人乗りの船で家族や友人で行うため、またココナッツ農園でもユイ（互酬的行為）のような労力交換の慣行はない。日本のモヤイ（再分配的行為）に当たる共同作業（労力モヤイ）では、漁村でインドネシアと同じゴトンロヨンの精神で漁民が年3回港の掃除などをする。他に河川の清掃関係では州レベルの組織がある。農村では共有地はないが、漁村では海岸や森は州の土地で勝手に木を伐採できない。墓地やモスクなどの清掃はボランティアでするためペナルティ（過怠金）はない。日本の頼母子や無尽に相当する金銭モヤイでは金融互助の言葉として、年配の人が多く使う duit undi（duit は金、undi は選ぶの意味）、若い人が使う duit kutu（kutu はダニ＜血を吸う＞の意味）があり、原則利息がつかない。支援（援助）的行為としてテツダイでは葬儀で葬式組が活動し、婚儀では料理などの手助けをするルワング（rewang）という行為に基づく互助ネットワークが機能している。

4. 結論

農村では共有地が見られず共有意識は希薄で、全体として互助慣行はかつての日本ほど強くないことがわかる。今後近代化でさらに互助ネットワークは変容を余儀なくされるが、自生的な社会秩序として互助慣行の変化を注視していきたい。今回の知見を踏まえ日本と東アジア、東南アジアと比較しそれらに通底する互助慣行の解明が今後の課題である（科学研究費助成事業＜学術研究助成基金助成金＞：平成27年度～31年度、基盤研究C、研究課題「日本と東南アジアの互助ネットワークの民俗社会学的国際比較研究」、課題番号15K03860、研究代表者＜個人研究＞恩田守雄）。

＜参考文献＞

恩田守雄、2006『互助社会論』世界思想社。2019『支え合いの社会システム』ミネルヴァ書房。

Onda, Morio. 2013. 'Mutual help networks and social transformation in Japan,' *American Journal of Economics and Sociology*,71(3):531-564.